

杜 甫 の 晩 年

唐の代宗の大曆三年（西紀七六八）、杜甫は数へ年五十七歳を迎へた。すまゐは昨年の秋からゐる夔州（いま四川省奉節県の東十三華里の白帝城）の東屯である。あと三年とない余生をかれは日夜おもひながら、それゆゑ事ごとくに詩に詠じ、それが決して当座のつまらないものとはいへないところゝ、世界でも一流の詩人の真価が証明される。すなはちこの年の第一の作は、題が示すやうに「元日、宗武に示す」といふ詩で、長男宗文よりは愛したかにおもはれる次男に見せた作である。

元日示宗武

汝啼吾手戰　おまへはわが手がふるへるといって泣くが
吾笑汝身長　わしはおまへのせが高くなつたのではほほ笑む。

田 中 克 己

處處逢正月	おもへば方々で正月に逢ひ
迢迢滯遠方	はるか國のはじつこにとどまつてゐる。
飄零還柏酒	さすらひの身ながら（正月の）柏の葉をうかべた酒のみ
衰病只藜牀	病み衰へた身をアカザのベッドに横たへてゐる。
訓諭青衿子	勉学中のわが子にさとしながら
名慚白首郎	しらがで工部員外郎といふ微官の名を恥ぢる。
賦詩猶落筆	手はふるへるがわしはまだ詩は作れるし
獻壽更稱觴	おまへは父の長命を祝つて杯をささげてくれる。
不見江東弟	ただ江東の弟に会へないので
高歌淚數行	高らかに歌ひながら涙がいくすぢか流れる

といふのがその作で、最後の行の涙の原因である江東の弟は、近ごろ消息のない豊といふ弟だと、みづから註にしている。

この日もう一首、宗武への詩があり（又宗武）、この次男が数へ年十五歳となり、詩の律をもころえ、机の上にはいっぱい本をとりちらしたりしてゐるから、文学は好きなやうだが、文学だけではだめで、経世の学である儒学もやって、曾参や子游・子夏のやうになれ、とはげましている。従つて宗武の生まれたのは数へてみると、玄宗の天宝十三載（西紀七五四）、安史の乱の直前で、乱中・乱後のつらい思ひ出につけても、その生長がどんなに詩人にはうれしいことだったか想像がつく。

元日の作には、また弟をおもつた詩があつて、すなはち「遠く舎弟くわん・觀くわんらを懐なつふ」といふ詩で、まへに音信不通とした杜豊とちがひ、その上の二人の弟杜穎・杜觀はるどころがわかり、杜穎のほうは陽翟（いま河南省禹県）にをり、杜觀は荆南すなはち揚子江中流の江陵にゐて、近ごろ書をよこしたといつて、この弟に会ふために近日中に揚子江を下る予定となつたことを明らかにしてゐる。天涯孤独の人の思はれがちな詩人で、杜甫ほど肉親を詠ずるものは少ないが、人みな志を新たにす元日に、弟たちのこと

を詠ずる点からも、肉親愛の強さが証明されよう。觀からの手紙は引きつづいて来て、杜甫の決心をいよいよ堅めさせるが、それはこの直後で、これまた「續ついで觀の書を得、當陽の居止に迎へ就かしむるに、正月中旬、定めて三峡を出でんとす」といふ詩によつて明らかとなる。すなはち江陵の北の当陽県の弟の新居へ迎へられて、正月半ばには出発することを題で示し、洞庭湖畔にもゆき、最後はやはり皇都すなはち長安へゆくことを詩中でのべてゐる。これが二日のことだったらうか、三日は太歳日（歳の干支と同じ日）に當つたので、これを祝する長安の官吏たちのことを思つて、同じく帝都への思慕を述べてゐる。この皇帝への忠誠の情は、他の詩人よりあらはで、中共治下ではあまり買はれないが、杜甫の家に流れてゐる唐の皇室の血などから、当然なことといへよう。

正月七日はまた祝日で、人日といふ。杜甫はこの日、その題で二首作り、第一首めでは、いまゐるところが元日から曇りつづけてあることをいひ、もつれた鬢の毛の久しく薄いことを結句で詠じる。思へば杜甫は若白髪で、それを詠ずる作も多かったが、ここに至つて髪の薄いのをも歎いてゐるのである。哀れなことではないか。ただし人日の祝として柏葉酒をまた飲んで笑ひさざめく人々と、暖い方角へ

ゆく自分も同じく喜んでゐる趣を第二首に歌つてゐる。氣候に敏感なのも老いの徴候の一つである。読者は喜ぶよりむしろ憐れまねばならないのを感じる。

長安への復帰が最後の目的となら、このころ伝はつた昨年十月にチベット族の吐蕃が靈武(いま甘肅省)で敗れ、十一月に和蕃使が吐蕃の首領をつれて帰京したことが、正月早々に知れたことも、杜甫にとつて大きな喜びであつた。長安方面が吐蕃の入寇で荒されてゐたことが、その帰京をためらはせる主な理由だつたからである。「喜んで盜賊の總べて退くを聞きての口號」五首は長かつた唐と吐蕃との關係をのべて、「詩史」といはれる杜詩のモデルのやうである。すなはちその第一首は、唐軍が蕭關(甘肅省固原県の南)、隴水(その南、隴原のあたりに発する)まで進出したことをいひ、第二首では吐蕃の贊普(王)はしばしば和好の使者を遣はしてゐたのに、哥舒翰が隴右節度使としてこれを攻めた天宝元年(西紀七四二)から、兩國の平和が破れたことをいひ、第三・第四首ではシルクロードを駱駝や馬につまれて持ちこまれた勃律(インドの西北境ベルチスタン)の西、堅昆(キルギス)の碧琉璃の碗も来なくなり、これに対する唐朝の答礼も絶えたといひ、第五首では大曆三年の平和をととのへたまうた玄宗皇帝(老子)の遠孫なる代宗皇

帝をほめてゐる。

杜甫はこのころまた縁談の世話をしてゐたが、これは新婦候補の叔父が長安からよこした手紙で、すでに許婚してゐることがわかつたので、手を引いたことが、折しも通州(四川省達県)へゆくこととなつた新郎候補封某の送別の詩で知られる。仲人は詩作とともに乏しい詩人の収入源の一だつたかと察せられる。

さて出発前のも一つの用事はもつてゐる土地家屋の売却である。家は破れ家を買ひ手があつたかどうか、漢西の果樹園四十畝は南卿(吳某)に贈つたとしるす。ただのプレゼントでなく送別費として代金を受取つたのであらうが、詩の常としてそれはいいはない。この果樹園には直径三寸の蜜柑が多くなつた(「雨に阻まれて漢西の甘林に帰ることを得ず」——昨年の作)ほか、菜や瓜も出来(同年の「園官菜を送る」、「園人瓜を送る」)、この時の詩では「雜藥 紅 相對す、他時 錦もしかず」と春さきさまさまの紅い花の咲いた趣を詠じてゐる。

江陵行の舟に乗つたあと、「大曆三年春、白帝城より船を放ち、瞿唐峽を出づ。久しく夔府に居り、將に江陵に適かんとして漂泊、詩有り凡て四十韻」といふ長い詩を作つた。白帝城より江陵まではおよそ三百華里、その途中の景

がくはしく歌はれてゐる。すなはち楽しみにした旅も、舟に乗ってみると、自然とためいきが出たといふところからはじまると、巫山の神女峰を美しくながめ、王昭君の故里（湖北省秭帰県）は眺めやっただけで、峽路の難行では書物は傾き（どんな本をもってゐたか）、物をつめたふくろも濡れたことをいひ、やがて流れがしづかとなつて、宜都をすぎ、松滋県の城郭をも眺めやつて、江陵の天皇寺に近くなつたことがうれしい。ここには王羲之の書や張僧繇の孔子や顔淵など十哲の画があるからと註してゐる。しかし結語としては江陵での生活に対する不安をもしるして、この長い詩はおはつてゐる。不安はほかならず、武官全盛で、文をもつてする杜甫をゆくての武官たちがどう扱ふかといふことである。従つて江陵につくまへすで、江陵節度使で陽城郡王の爵をもつ衛伯玉の幕府のものに依頼の詩を呈してゐる（「行くゆく古城店に次りて江に泛ぶ作、郵拙を揆らず、江陵の幕府諸公に呈し奉る」）。題にもあらは、詩中にはまた「王門 徳業高く 幕府 才賢盛んなり」とあひてをほめ、みづからを「行色 多病を兼ね、蒼茫たり汎愛の前」と憐みを乞ふありさまが卑屈に過ぎる。

江陵ではたまたまここにゐて、衛伯玉の部下だつたといふと杜位の宅に入った。「雨に乗じて行軍六弟の宅に入る」

がその趣をしるす。

曙角凌雲亂 あげぼのの軍の角笛が雲ままで乱れ流れる

春城帶雨長 春の江陵城は雨中に遠くつづいてゐる、

水花分塹弱 はすの花ははりの一部を占めて弱々しげで

巢燕得泥忙 巢をつくる燕は泥をくはへて忙しい。

令弟雄軍佐 そなた 令弟は軍の輔佐官として雄々しげだが

凡才汚省郎 わたしは工部員外郎の職を汚してゐるだけだ。

萍漂忍流涕 うき草のたゞよふ身で流れる涙をおさへ

衰颯近中堂 力なくそなたの座敷に近づいてゆく。

これがいとこ杜位の家に厄介になる詩人の姿である。家族全部をつれての居候では、かく感じ、かく歌はざるを得なかつたであらう。ところで、白帝城を出る時の予定だつた弟との交渉は今後その詩には見えない。どうしたことであらうか、永久の謎である。他人には召されて宴席に連り詩を作らされた様子が多く見えてゐる。上巳の日、すなはち旧暦三月三日には司録参军徐某の宴にゆき、晩春には侍御史胡某の宴につらなる。同席には註によれば礼部尙書李

之芳、秘書少監鄭審がゐた。ともに従来からのつきあひがあり、特に鄭審は杜甫の一番の親友故鄭虔（これに先だつ四年の広徳二年に流された台州で死んだ）の弟である。二人ともに文官、主人の胡も文官で、はぶりはあまりよくなかつたらうが、後者の末句は「吾儕醉へども歸らじ」である。ただし事實は二次会として李之芳を呼んだことは「書堂にて飲耽り、夜また李尙書を邀へて、馬より下り、月下に賦す」といふ題の絶句が示し、杜甫はこのはしこ酒を五更（午前四時）までとすすめてゐる。

わたしは飲酒の楽しみを解しないで、残念であるが、杜詩のいたるところに見える酒の詩は、李白とは趣きを異にしながらも、おとらぎ酒好きであつたことを証明する。送別の宴こそその絶好の機会であつたらう。蘇州へ赴任する長史李某、長安にかへる馬某の送別の詩がいづれもこの年の暮春の詩であつて、老病の身を事とせず杜甫は大いに飲んでゐる。暮春三月の酒宴の詩はまだ二つあつて、一つは江陵縣尉宋某の宴会（これにはいとこ杜位も参加してゐる）、も一つは李之芳らと鄭審の湖亭の舟上の宴である。同じ場所で四月にも宴があつたが、この度の客は宇文晁・崔颢であつた。これに先だつての作なる「短歌行、王郎司直に贈る」はわたしの好きな詩である。

王郎酒酣拔劍斫地歌莫哀

王君は酒がたけなはになると劍をぬき、大地をきり「かほど哀しいことはない」と歌ふ

我能拔爾抑塞磊落之奇才

わたしはきみのたくひまれな奇才の抑へつけられてゐるのを引きぬかう

豫章翻風白日動

舞は樟の大木が風にひるがへり太陽が動くやう

鯨魚跋浪滄溟開

またくじらが浪を踏んで大海が開くやうだ

且脱劍佩休徘徊

しばらく劍をすてて立ちまはりをやめよ

西得諸侯棹錦水

きみは西の方の諸侯に用ひられ錦江に浮ばうといふが

欲向何門跋珠履

いったいどの門で珠の履をはくつもりか

仲宣樓頭春色深

王仲宣の樓のほとりは春色ふかく

青眼高歌望吾子

私は青眼し高歌して君の旅立ちを眺める

眼中之人吾老矣

この青眼にうつるきみよ「わしは老いた」

たぶん杜甫の高歌は声しやがれてゐたのであらう。「眼中の人よ、われ老いたり」の結句が悲しいではないか。

老人の常として思ひ出を歌ふのは当然だが、この夏の作

である「憶昔行」は昨年の「昔遊」とほぼ同じく、王屋山（山西省陽城縣と曲垣縣の境）に住んだといふ華蓋君すなはち仙人王子喬の跡を訪ねた思ひ出をのべ、儒者、儒教的としでのみ知られる杜甫が、李白と同じく道教にも関心をもつてゐたことを明らかにする。結句はさらに懲りないで衡陽の董道士を訪ねて、永劫の生命を与へる仙方を受けるために瀟湘をさかのぼらうとの意志を示してゐる。

天下国家を考へる時は儒教、個人の幸福を志しては道教と、矛盾してゐるやうだが、仙方の効があらはれたあかつきは、現世が無限にのびるのである。現世的な中国思想としては、杜甫には矛盾は考へられなかつたのであらう。

同じく歌行である「惜別行」も、衛伯玉の使者として、端午の節句の御衣を献上しに長安にゆく向某を詠じてゐるから四月の作で、結句は「卿、朝廷に到らば老翁を説け、漂零すでにこれ滄浪の客なり」といって、長安へ呼び迎へられることを依頼してゐるが、向某ははたして呼び戻しを当路に説いたらうか。ただ詩人の恋關をいたますのみである。

李之芳とは詩を聯ねてその甥の宇文晁の石首県令として赴任するのを送ったりしてゐるが、夏の江陵は病身の杜甫には耐へがたかつたのであらう、「多病執熱、李尚書之芳

を懐ひ奉る」といふ詩では、その水蒸氣と暑氣の耐へがたく、招かれた宴にも出席しがたいことわり、「水宿興を遣る、羣公に呈し奉る」といふ詩では、「魯鈍にして仍ほ多病、逢迎遠くしてまた迷ふ。耳聾にしてすべからく字を畫くべし、髮短かくして、篋をすするに勝へず」と招かれてもゆけないことをいひ、「董稚しきりに書札、盤殮なんぞ糝黎なると」といって、たぶん当陽縣（江陵の西北）に置いた子供たちのアカザと豆の雑炊に不平をいって来てゐることを示してゐる。「悶を遣る」の詩も舟宿りの作で、氣候の耐へがたいと同時に、まだ兵戈の収まらぬのを憂へ、「百年（の生涯）は萬事（天に）從せども、故國は歌として忘れがたし」と憂國の情をもって結んでゐる。

かういふわけで詩人を悩ましたのは氣候と病身だけでなく、秋には「江邊星月」の第二で、「客愁いまだ已まず」といひ、「舟日、驛に對し寺に近し」でも「皓首江湖の客、簾を鈎していまだ眠らず」と不眠をうたへてゐる。理由はほかならず、老年性憂鬱病と診断してまちがひあるまい。

前の詩にあつたやうに、青眼もて視る友人はゐたかもしれないが、杜甫はもう白眼視することを許されてゐない。江陵節度使衛伯玉はこの地方の王者である。これが新様が

成ったとて、下僚に詩を作るとを命じると、詩人は唯々としてとも詩を作つてゐる（江陵節度使、陽城郡王の新楼成る。王、殿侍御判官に請ひて七字句を賦せしむ。同じく作る）一首では足りなかつたか、もう一首作り、結聯は

白頭授簡焉能賦

媿似相如爲大夫

このしらがに紙を賜はつても賦は作れようか
司馬相如が（梁王に）大夫として扱はれたとそっくりなのはぢい

と低姿勢で媚びてゐる。梁王と司馬相如との関係はともあれ、杜甫は相如をしのぐ中国第一の詩人であることを自覚してゐないのか。衛伯玉はもとより漢の梁王のごとき皇族ではなく、ただの軍閥に過ぎない。その詩人を遇することも十分でなかつたことは、秋になって作った「秋日、荆南の述懐」といふ三十韻の長詩にあらはれてゐる

苦搖求食尾

私は食を求めて尾をふるのに困つてゐる

常曝報恩鯁

いつも天子への報恩の念をもちながらえら舌を動かしてゐるのみである。

結舌防讒柄

舌をとめて讒言の源とならぬやうにしてゐるが

探腸有禍胎

腹中までみられれば禍の生まれ場所はあるのだ。

蒼茫歩兵哭

前途もくらく阮籍のやうに哭し

展轉仲宣哀

ねがへりばかりうって王仲宣のやうに哀しんでゐる。

饑藉家家米

飢ゑては家々の米を借りあるき

愁徵處處盃

愁へては方々に酒をもらひにゆく。

休爲貧士歎

しかも貧士のなげきはやめて

任受衆人哈

多くの人の嘲笑にまかせてゐる。

といふ箇所のごとき、このころ恩を施した人々への不満が明らかに示されてゐる。同じくここ江陵の人々のたのむに足りないことを示してゐるのは「秋日、荆南にて石首の薛明府が滿を辭し告別するを送り、薛尙書に寄せ奉る。徳を頌し懷を敘す、斐然の作」といふ同じく三十韻の長詩で、宇文晁と交代して都にゆく石首の県令薛據に、その兄なる尙書薛景仙への頌詩を托して拔躍を乞うてゐるのである。

應訝耽湖橘

尙書どのあなたはわたしが湖辺の橘が好きなのをいぶかつておいでにちがひないが

常餐占野蔬

私はいつも野菜を主食にしてをりますよ。

十年嬰藥餌

そのうへ十年も薬ばかりのんでゐる

萬里狎樵漁

この遠方で樵夫や漁師と付合つてゐます。

と、都ではわからないだらう不自由な生活を訴へてゐるのは、もとより引きたてを乞うためだが、末句ではそれをうち消すかのごとく

努力 輪肝膽 皇帝のためにみ心をささげなかり

休煩 獨起予

ひとりこのわたしを引き立てるやうなことはお止めになるやう。

と、見えすいたうそをいってゐる。

薛景仙の引き立てははたしてなかつたが、杜甫はそれをあまりあてにしてゐたやうではなく、この秋には、引きつづいて不平の詩を多く作る。「暮歸」の詩の後半は、

南渡桂水關舟楫

南方へ桂水をわたらうとすれば舟がないし北の長安にかへらうとすれば戦鼓の音がする

北歸秦川多鼓鞞

年過半百不稱意

よはひ五十歳をすぎて思ふやうにならぬ

明日看雲還杖藜

明日は雲を見てアカザの杖をつかうか。

とゆくての不安をいひ、「江漢」、「地隅」みな同じく不平をいふ。はたして晩秋には江陵を去り、その南九十華里の公安にゆく。出発の時の作は「舟、江陵の南浦を出づる時、鄭少尹審に奉る」といふ鄭審への別れの詩であり、公

安に着いてからの作は「居を公安の山館に移す」といふ詩である。公安はさらに辺地であり、舟をすてて住んだのが山館であるといふ事がすでに示してゐるやうに、この詩はさらに悲しい。

南國 晝多霧 南國は昼なほ霧が多く

北風 天正寒 北風が吹いてそらは本当に寒い。

路危 行木杪 ゆく路の危きは木ずゑをゆき

身遠 宿雲端 身ははるか雲の上に宿る。

山鬼 吹燈滅 山の鬼ばげものが灯を吹き消したと

腐人 語夜闌 台所のものが夜なかに話してゐる。

鷄鳴 問前館 にはとりの鳴くころゆくてのやかたのことを聞いたが

世亂 敢求安 世が乱れてゐるので一か所にじつとをれないのだ。

杜甫はおそらくここでまた江陵での知己の李之芳の訃を聞いた。「相知、白首と成る、此の別、黄泉を問たつ」といふ句をまじへる「李尙書を哭す」と「重ねて題す」とが、このときの詩で、後の詩の註では、李之芳が太子賓客にうつってゐたことを記してゐる。ふしぎなことに悲事はつづ

く。長安でともに朝官だった散騎常侍李暉（えき）の死もこの直後である。これは広東で死んだので、その柩は梅嶺を越えて長安に帰ってゆくのである。二首の哀悼の詩の第二には、「次第に書札を尋ね、兒を呼びて贈詩を檢せしむ」の句があり、宗文・宗武にいひつけて手紙をさがし出させ、その中の彼の詩をふたたびよみなほしてゐるといふ。老人の悲しみは知己の次々と死んでゆくことだと、わたしもこのごろになってやうやく実感するやうになった。

公安での後援者は少府（すなはち県尉）だった顔某、顧戒奢、衛鈞（きん）、同じく県尉の韋匡贊などだったが、韋・顧には送別の詩を贈ってゐるから、すぐよそへ去ってしまふ。残った顔某にはあきたらなかつたのであらう、李晋肅（詩人李賀の父）が四川へゆくのを送る詩には、沔鄂（べん）すなはち沔州（もとの漢陽）、鄂州（もとの武昌）といまは合して武漢市といふ揚子江中流の都会にゆかうといふ志が見える。「久客」の詩がそのころの詩人の心中を伝へてゐる。

羈旅 知交態 旅してゐると人の交際のさまがわかり
淹留 見俗情 逗留してゐると世間の人情がわかる。

衰顔聊自晒 私は自分の衰へた顔つきを自嘲してゐるが

小吏最相輕

小役人どもがいちばんわたしを馬鹿にしてゐる。

去國哀王粲

故郷を去ってかの王粲をかなしく思ひ出し

傷時哭賈生

時事をいたんで漢の賈誼を哭する。

狐狸何足道

狐狸のごとき小役人はいふに足りぬ

豺虎正縱橫

豺虎のやうな軍閥が横行してゐるのだ。

公安を去るとき、別れの詩を与へたのは僧大易だけで、狐狸すなはち顔某などには憤るだけであつたらう。公安からの行くべきは、武漢をめざしたが、途中、岳陽で歲暮を迎へた。「歲晏行」はその直前に成つた傑作の一つである。

歲暮暮矣多北風

年はここに暮れて北風が吹く

瀟湘洞庭白雪中

瀟水・湘水や洞庭湖も白雪に降りこめられてゐる。

漁父天寒網罟凍

空が寒く漁師は網がこぼりつき

莫徭射雁鳴桑弓」バクヨウ族は桑の弓で雁を射てゐる。」

去年米貴闕軍食

去年は米価が高く軍隊の食糧が不足だった

今年米賤太傷農

今年米価が安く農民がこまってる。

高馬達官厭酒肉

良馬に乗った大官は酒肉にあきてゐるが

此輩杼袖茅茨空

人民たちは機を織っても家中無一物だ。

楚人重魚不重鳥

このあたりの人間は魚が好きで鳥を好かない

汝休枉殺南飛鴻

獵師よ南にとぶオホカリをむだに射殺するな

况聞處處鬻男女

まして人民たちはむすめむすこを売り

割慈忍愛還租庸

愛情をさしおいて税金を収めてゐる。

往日用錢捉私鑄

むかしは私鑄の錢を作ると捕へたが

今許鉛鐵和青銅

今では鉛や鉄を青銅にまぜるのを許してゐる。

泥刻爲之最易得

泥の鑄型をつくれればすぐできるのだ

好惡不合長相蒙

好い錢と悪い錢とをまぜてごまかしてはならないのに。」

萬國城頭吹畫角

いいましたるところのまちは軍の角笛を吹いてゐる

此曲哀怨何時終

そのメロディーの哀れさはいつの日やむことか。」

憂國の情がたくみに写されてゐる。岳陽に着いてからは「岳陽城下に泊す」、「船を纜ぎ風に苦しみ、戯れに題す四韻、鄭十三判官に簡し奉る」が作られ、後者では酒家への幹旋を乞うてゐる。酒はとどけられたかどうか、今ものこの大傑作「岳陽樓に上る」はこの時の作である。

昔聞洞庭水

むかしから洞庭湖のことは聞いてゐたが

今上岳陽樓

いま岳陽樓に上ってながめてみる。

吳楚東南坼

吳と楚の地は東南方に引き裂かれ

乾坤日夜浮

天地はこの湖水にひるも夜も浮んでゐる。

親朋無一字

親戚・朋友から一字のたよりも来ず

老病有孤舟

わたしは古い病んで一隻の舟だけをもってゐる。

戎馬關山北

しかも兵馬は關山の北にはびこってゐるの

憑軒涕泗流

軒ばによりかかって涙が流れるばかりである。

「乾坤日夜浮」の乾坤を先師鈴木豹軒先生（わたしは一時この師について漢詩を見ていただいた）は副詞に用ひて、「天地の大なるひろがりのうちに」湖水が浮動してゐると訳しておいでである（岩波文庫「杜詩」八、昭和四一年刊）が、目加田誠博士の訳の方がふつうなとりかたであらう（「杜甫」漢詩大系九、昭和四〇年刊）。とまれ弟妹たちからも朋友たち（その多くは亡くなつてゐるのである）からも一字のたよりが来ないと嘆くのは、世の乱れのみならず、人間のはかなさ、たよりなきを知らしめて同感をそそるではないか。

大曆四年（西紀七六九）、杜甫は五十八歳となった。芭蕉（五十一歳で歿）、朔太郎（五十七歳で歿）より長生きし、白秋の亡くなつたと同じ齡になつたのである。これより長命の大詩人はその尊敬した先輩李白、ゲーテと西行、茂吉、光太郎（先師春夫は大詩人といへるかどうか）ぐらゐであらうか。

この正月、杜甫は岳州刺史（岳陽を治所とする）裴某のともをして、また岳陽樓に上り、これを讀へる詩を作つてゐる（使君に陪して岳陽樓に上る）が、その結句ではさらに南方にゆく意志を示し、この南で死んだ屈原のことにも触れてゐるが、はたして「南征」、「歸夢」、「南嶽に過ぎらん」として洞庭湖に入る、「青草湖に宿す」、「白沙驛に宿す」と湖中の舟旅のあとをしるしてゐる。白沙驛は湘陽県の地であるから、大湖洞庭をよぎり、南岳衡山へとめざしてゐるのである。従つてここから道は湘江の流に入る。ここには湘江の水神なる湘夫人の祠がある。伝説では湘夫人は帝舜の二妃娥皇・女英のことだともいふ。「湘夫人の祠」はそのおみやにまいつての作、そのあとでは「祠南の夕望」の作があり、

百丈牽江色 百丈の竹なはで引いてゐる

孤舟泛日斜 わたしの舟は夕日影の中に浮んでゐる。

興來猶杖屨 興がわくと杖つきくつをはいて上陸する

目斷更雲沙 ながめわたす先にはまた雲と砂。

山鬼迷春竹 山の鬼ばけものは春の竹むらで迷つてをり

湘娥倚暮花 夕方の花によりそうのは湘夫人だらうか。

湖南清絕地 洞庭湖南は清らかさきはまらないが

萬古一長嗟 流された屈原などをおもつて長い吐息をつく。

屈原に同感してゐるさまが明らかである。流れにさからつて舟をやるために、曳き子をやとひ、これに繩をひかしてゐるが、費用はどうしたらうか。ひとごとながら気になる話である。この遡流中のうたが「上水の遺懷」で二十二韻の長詩、「遇を遣る」も同時の作で、なかには寢食を廃して風にさからう船頭に感激するとともに、岸辺のぜんまいとりの女を歌つたりすること、杜甫の面目はあひかはずである。途中に急流があつたが、これも無事に過ぎた。もう自分の舟ではなくて、相乗りだったと見え、自分の食べる米の量を減じて、同舟のものに与へてゐる趣が詠じられてゐる（憂ひを解く）。鑿石浦（湘潭市）に着いたのは陰曆

の二月二日だったが、清明節（冬至から百五日目の前後三日が寒食で、そのあとが清明節である）は潭州（いまの長沙市）で迎へ、二首を作った。その第二首は清明節の行事と杜甫の肉体の状況とを、あはせて述べてゐる。曰く

此身飄泊苦東西

この身は東に西にと漂泊して困つてゐる

右臂偏枯半耳聾

右の肘はきかなくなり左の耳は聞えない。

寂寂繫舟雙下淚

さびしく舟をつなげば両眼から涙が出

悠悠伏枕左書空

いつまでも寝こんで左手で空に字をかく。

十年蹴鞠將雛遠

十年間まりを蹴る日に子供を遠くつれゆけ

萬里鞦韆習俗同

この遠い土地でもぶらんこをする習俗は同じだ。

旅雁上雲歸紫塞

旅の雁は雲の上を長城線へと帰るが

家人鑽火用青楓

家の者は新しい火を作るに青楓を用ひる。

秦城樓閣煙花裏

長安の樓閣はもやと花に囲まれ

漢主山河錦繡中

わが君の治めたまふ山河は錦繡の美しさだらう。

春水春來洞庭闊

ここでは春の水に春が来て湖面は広くなり

白蘋愁殺白頭翁

白い花の浮草が白髪のぢちをかなします。

清明節のまへは寒食で、くりやの火を消し、清明には新しい火をおこすが、南方とてニレや柳のかはりに青楓とちがふ植物を用ひてゐる。それもかないが、半身不随と老眼、片つんぼと老年の徴候がみなそなはつてゐるのである。さて潭州を出て湘江をさかのぼりながら、詩人はまた「詠懷」の二首をつくる。ともに時事を追懐し、国事をうれへてゐるが、ここには録しない。

衡州（いま衡陽市）の手前で、右がはに五岳の一つである南岳衡山が見える。杜甫を「望嶽」の詩をつくつて、この神山のありさまを画いてゐるが、この地方の官に祭典を盛大にするやうにと述べてゐる。さて衡州へ行ったのは、故友韋之晉が刺史だからだったやうだが、着くと韋はまた潭州刺史に改任されてゐたし、衡州の暑さは大変だといふので、初夏四月早々に潭州に引つかへしたやうである。「回棹」の詩がそれであるといふ（四川省文史研究館編「杜甫年譜」一九五八年刊）。この詩では漢水のほとり襄陽の岷山の涼しさを思ひ出してゐるが、潭州で韋之晉を哭したあととも、ここに留まったのは病臥したからと見える（「江閣にて病に臥し、筆を走らせて崔・盧両侍御に寄呈す」。ここでは夏はたへがたく、しかも長かつたらうが、秋には広東の韶州（いま韶關市）に行く韋超を送別してゐる。八月五日は玄宗の時

から千秋節（天宝七年より天長節と改称）であったが、秋も半ばのこの日には「千秋節に感有り」といふ詩を二首作つて、玄宗の開元年間をしのんでゐる。老いのくりごとと悲しいが、訳してみよう。その第一首は

自罷千秋節 千秋節がやめられてから

頻痛八月來 わたしは八月の来るのをしきりに痛ましく思う。

先朝常宴會 先朝ではいつも宴会をされたが

壯觀已塵埃 その壯觀も塵埃と化した。

鳳紀編生日 帝紀にのみ御誕生日がしるされ

龍池塹劫灰 おすまひの竜池も火災の灰で堀のやうになつた。

湘川新涕淚 ここ湘水のひとつりでいまさらに涙を流すが

秦樹遠樓臺 みやこの木々の中の楼台の遠さよ。

寶鏡羣臣得 むかしは鏡を臣下たちはいただいたが

金吾萬國迴 いまその近衛軍も諸方に帰ってしまった。

衛尊不重飲 あのところ飲んだ大路の接待酒ももう飲めず

白首獨餘哀 しらがのわたしはひとり哀しみきれないでゐる。

と、時間も場所もはるかになつた節供をしのび、第二首も

御氣雲樓敞

天子さまは虚空へとそびえる高どのに昇られる

含風綵仗高

風にはたはたと五色のさしものが高みで鳴つてゐる。

仙人張内樂

宮中の樂が盛んに奏せられると

王母獻宮桃

西王母（楊貴妃）が仙桃を献上する。

羅襪紅蕖豔

うす絹の靴下つけた足は赤い蓮のやうにあでやかで

金羈白雪毛

黄金のきづなをつけた白馬も登場し

舞階銜壽酒

舞ひながら階段を登って寿盃をくはへてゐるが

走索背秋毫

美人は細い綱の上を二人背を並べて渡る。

聖主他年貴

かやうに天子さまは往年は尊貴であらせられたが

邊心此日勞

今日この日わたしは辺陲な地で心をいためる。

桂江流向北

桂林よりの大川は北に向つて流れるが

滿眼送波濤

わたしは眼をこらして川波を見送つてゐる

北流する桂江すなはち湘水の下流を、詩人は一心に見つ

めてゐるが、君恋しく都こひしいとの心であらう。

はたして「舟に登り將に漢陽に適かんとす」の詩があつて、秋には武漢市に向つて乗船するが、船はなかなか動かない。「惜別行、劉僕射判官を送る」の詩は、山南東道節度使の判官として、襄陽から馬を買ひに來た劉某を送る作であるが、その中に「杜陵の老翁、秋、船を繫ぐ、病を扶けて相識る長沙驛」といひ、船を繫いでゐることをあかす。また「三たび聚散を嘆じて重陽に臨む」の句から、その作が旧曆九月九日であつたことも知られる。

かうして江中で留まつてゐる間に往來したものに蘇渙、李曠、張建封、魏封、長孫漸らがあつたことは、それぞれに贈つた詩がのこつてゐるので知られる。その中に冬が來ても杜甫はまだ船が出せない。「北風」、「雪に對す」などみな船中の作である。

大曆五年（西紀七七〇）、杜甫は五十九歳となつた。「故の高蜀州が人日に寄せられしに追酬す」の詩には、長い序があつて、この年正月二十一日、文書の帙を開き、高適が人日に寄せた詩を思ひだしたが、それこそ十年まへのことで、この六、七年はその人のありやなしやも忘れてゐたといひ、「老病、旧を懷ふ、生意知るべし」とさびしさを

いひ、今だに生きてゐる友人は漢中王瑒と敬超先とだけだと、二人に詩を寄せてゐる。高適は李・杜にはおよばずとも盛唐の代表詩人の一人で、上元二年（西紀七六一）、杜甫が成都の草堂にゐたころに往來したのが最後となつたのである。人日（正月七日）の詩を寄せたのは、乾元のところであらう。高適の死は永泰元年（西紀七六五）で、杜甫の五十歳だつた年である。死ぬ時の官は左散騎常侍より渤海郡侯に封ぜられ、食邑七百戸といふのが詩人としては珍らしいと「旧唐書」にも記してゐるが、年齢は杜甫よりやや長かつたらうか。「五十歳から詩を作りはじめた」といふ伝説があるが、たしかではない。この詩人の詩を見つけたしのが、漢中王なる李瑒と昭州（いま広西省平樂県）の刺史敬超先とを思ひ出す理由となつたのである。ともに高い官爵をもつてゐるからで、この詩も二人のひきたてを請ふ意があきらかである。広西省にでも招かれればゆく気があつたのかと、ふしぎに思はれやうが、去年の作なる交（ベトナムのハノイ方面）、広（広州市）にゆく魏佑に贈つた詩にも、かしこには朱門の家があつて蛟を彫刻し、美食は王者に次ぐほど、音楽も盛んになでられるし、侍婢は傾城の美しさに絹の衣をつけ、手には琥珀の杯をもつて酒をつぐ。友情が厚くなると、真珠や碧玉が贈られる、ともはや蛮地と

思はない様子がうかがはれるし、特に今年の春の作なる王
祜ひょうこの南海に送るのを送る詩には、これとの親戚關係をな
らべ立て、王祜の高祖父王珪けいの履歴をもくはしく述べ、安
祿山の乱中ともに逃れたことを思ひおこすなどしてゐる。
なつかしくもあつたらうが、依頼の気持も見られるのでは
なからうか。

この年も「清明」の作があり、その終りは

弟姪雖存不得書 弟やをひはゐるが手紙を得られず

干戈未息苦離居 いくさはやまないで別れてゐるのに困る。

逢迎少壯非吾道 少年壯年のものと応接するのはわが道では
ない

況乃今朝更被除 ましてやけさは上巳のみそぎの日に当つて
ゐる。

と、節供にふさはしく、感慨を示すが、老いのくりごと
の感じが強い。

南海へはともかく、眞実は長安へ歸りたかつた。「小寒
食、舟中の作」にも北に流れる水を見ては、やはり長安を
愁へつつ眺めやつてゐる。しかし四月には長沙で臧玠ざうがいが乱
を起して、潭州たんしゅう（長沙）の判史崔瓘さいを殺した。杜甫は難を
避けてふたたび衡州に行った。「衡州に入る」といふ長詩

がそれで、乱を起した臧玠が悪者で、殺された崔瓘のよき
地方官であつたことをくはしく述べ、衡陽刺史の陽濟をた
よつて来た趣を明らかにしてゐる。ただし乱がここに
波及するのを恐れたか、陽濟の援助がたよれないのか、こ
の詩には詩人の舅（母方のをぢ）崔偉すいゑいがある。郴州ちんしゅうの涼しさを
のべて、そこへゆかうとの句で終りとしてゐる。郴州はさ
らに二百華里南のいまの郴県である。崔偉からは實際たび
たび招きの書が来たので、耒陽縣の境の方田駅まで行つた
が、耒水が氾濫してここにとどまること五日、食物も欠い
たが、やっと耒陽縣令聶某てつぼうが手紙と食物とをよこした。杜
甫はこれに謝する詩を作り、中に叛軍を伐つ軍が到着した
ことをいつてゐるから、まもなく引き返したに相違ない。
「旧唐書」、「唐書」の杜甫伝はともにこの聶縣令からもら
つた酒肉を受け、一夕にして卒した、と記してゐるが、そ
の誤りであることは「棹を返す」の作のあることで知られ
る。長沙の旧宅もみすてて、洞庭湖をわたり（洞庭湖を過
ぐ）、岳州へのでまへで、詩人は風病にかかつた。風病と
は中風で、以前から半身不随だつたのが、再発して重態と
なつたのであらう。しかも詩筆をふるつて作つたのが、
「風疾にて舟中、枕に伏し懷を書す、三十六韻、湖南の親
友に呈し奉る」である。この詩が作れたのが、詩人の本懐

であつたらう。はじめに律は天地の気が正しくしてはじめて和する。今の乱世には正しい律の存在は不可能といひながら、つづけて古へに聞えた聖賢にはつひに会はず、旅では年中、病氣にかされ、眺めやるは故郷のみ、四辺は冬とて惨澹たる風景であるばかりか、冬なほ炎瘴の気がたちこめ、民俗も怪神を祀り怪鳥を射る。手にもつ杯にも弓の影が映るので、毒蛇が沈んでゐるかど驚く。思へば不運な

身で、天子をお諫めしてひどい目にあつたこともあり、狂人のやうに四方を放浪し、米粒の入らぬ粗末なものを食ひ、いく重にも縛つた脇息にもたれてうづら衣を着てゐる。岷山(四川省)のふもとで十夏をすごし、楚地(湖南省)では三たび秋霜にあつたといひ、うらみごとくに聞えないやうところどころで、この詩をあてた湖南の友人たちの親切を謝し、ついで天下の形勢を論じて、方々には天子の命に服しない節度使があるうへ、叛臣もまだ生けどりになつてゐない。中原からはたよりも来ず、干戈の盛んな長安の空には北斗星のみがかかつてゐる。自分はそれを見やりながら、遠方をさまよひ、各地の風俗を訪うたといひ

葛洪尸定解
許靖力難任

(仙人)葛洪のしかばねは解けて昇天したが
許靖のごとく親族を無事に避難させる力は
われにない。

家事丹砂訣 家事も仙丹の秘訣もともに

無成涕作霖 不成功だったのでなみだが長雨のやうだ。

とむすんでゐる。不幸な詩人の絶筆として、出来と不出来とは問題でなかつたらう。

死骸は岳州(岳陽)に仮に葬られたが、宗文はどうしたか。愛子宗武の子嗣業の時になって、祖先以来の墳墓のある偃師県(河南省)の西北の首陽山の前に葬られたといふ。墓碑銘は「唐故檢校工部員外郎杜君墓係銘并序」として、元稹の筆で、元和癸巳と年を記してゐるから、作は唐の憲宗の元和八年(西紀八一三)、正しく杜甫の歿後四十三年である。序には「詩人以来、未だ子美の如き者あらず」といひ、つづけて李白と並べ称せられるが、「李は尚ほその藩翰に歴る能はず、況んや堂奥をや」と、明らかに杜甫を揚げ、李白を貶してゐる。元和八年といへば、元稹が左遷されて江陵にゐた時のことであるから、この作はもとより偽りではあるまい。しかし元稹の年齢は三十四歳、壮年で、杜甫の真意がわかつたかどうか。

この銘文を依頼した嗣業は「家貧にして以つて喪に給す

るなく」父宗武の命のため昼夜苦勞して、いまやと僂脚に帰葬するのだとも書いてある。元稹はこの尊敬する先輩のため潤筆料を辭退したかどうか。その死んだ時、親友の白樂天はこれを大枚にとつてゐるので、貧しいながらも、杜嗣業がひとまづこれを用意したことにはまぢがひはない。

さてわれわれにとつてうれしいことは、この貧しい、祖父を尊敬した杜嗣業の子孫が永くつづいたことである。「杜詩錢註」は明の遺臣でありながら清に仕へた詩人錢謙益(牧齋)の杜詩の註であるが、その卷二の「述懷」の詩の註に「重授左拾遺誥、襄陽杜甫、爾之才德、朕深知之、今特命爲宣義郎、行在左拾遺、授職之後、宜勤是職、毋怠、命中書侍郎張鎬、齎符告諭。」とあつて日附は至徳二載(西紀七五七)五月十六日、黄紙を用ひ、高さ広き皆四尺ほど、字の大きき二寸ほど、年月のところには皇帝の宝印があり、これは五寸平方、いま岳州府平江県(汨水にそふ)の裔孫杜富の家に蔵するとある。杜甫の死後、千年もその子孫がのこり、その遺品を蔵してゐたのである(工部員外郎任命の誥は失つたのであらう)。これこそ杜甫の遺徳を示すものであらう。王侯貴族さへその後裔をのこさず、もしこれを称するものがあれば、かならずためにするところあつての仮

称、にせ系図である。杜富はさうでなかつたと、錢謙益とともに信じたい。

(杜甫伝の末節)